



伸びる教師の秘訣

服部 次郎 (筑波大学教授・筑波大学附属坂戸高等学校長)

教師が生徒や保護者、同僚からも信頼を得るには、授業スキルと「熱血教師」であろうとする心持が重要——。伸びる教師の秘訣を服部次郎先生に聞いた。

教師の必須条件

——教師にとって、最も大切な心構え、適性とは何でしょうか。

服部 それははっきりしています。教師は「熱血」でなければいけない。これに尽きます。

最近のテレビドラマで言えば「ごくせん」、あるいは長く続いている「3年B組金八先生」などで描かれているような熱血教師は、残念ながら実際の学校現場にはいません。

私たちも、「あんな先生、実際にはいないよ」と思っています。しかし、テレビドラマの中で活躍する先生には、「先生はあのようにあるべきだ」という一般的な人々が期待する教師像が集約されているといえるでしょう。

さらに教師の必須条件を挙げるとすれば、「健康であること」「明るいこと」「前向きな人生観・世界観を持っていること」「生徒にとってヒーローもしくはヒロイン的要素を持っていること」などがあります。

これはすべての教師に言えることです。生徒にとって先生は、格好よくて、多くの知識を持っていて、生徒の悩みに正面から向き合って答えられる存在であるべきなのです。

生徒にもさまざまなタイプがいて、前向きな生徒もいれば、後ろ向きな考えを持ってしまう生徒もいますし、こちらが信頼をしていますが、生徒に裏切られることもあります。そのような中で、いかに前向きに、単純に、また率直に、生徒に向き合うことができるかが大事だと思います。

心の中に熱血でありたいという要素を持っている教師はやはり伸びますし、良い教師です。また、誤解を恐れずに言いますと、良い教師と

いうのは生徒に人気のある教師です。生徒にこびたり、ラクをさせても人気は得られません。生徒は大したもの、そこはきちんと見ています。どんなに厳しくて怖くても好かれる教師もいれば、生徒のご機嫌をとっているようなことをしても、むしろ嫌われる教師もいます。

——熱血教師は、今は少ないかもしれません。

服部 今の若い先生方への私の不満は、教師が生徒より先にしらけてしまっていることです。

テレビドラマにあるような教師なんてあり得ないと思ったり、熱血というものに対して最初から斜に構えてしまっている。それは残念ながら時代の雰囲気もあるかもしれません。我々の時代には「頑張れば幸せになれるんだ」と思ってやってこられたこともたくさんありましたが、今はもう物質的に豊かで充足した世界がある。それゆえに若い人たちの人生観や世界観も、我々の時代とは変質しているように感じます。

——部活動などに燃えるのは「熱血教師」といえるのでしょうか？

服部 教師の幅を広げるという意味において、部活動に燃えるのはいいことだと思います。しかし、私学などで選任コーチとして招かれている教師などを除いて、授業に力を入れず、部活動だけに頑張る教師というのは駄目だと思いますね。よく、強い部の顧問になって、試合が多いために自分の授業は自習にしがちというケースがあります。やはり、それは駄目で、授業をしっかりやらない教師は認められないのです。

新任教師は授業第一

——新任教師に求められるものは何でしょう。

服部 まず新任教師は、何よりも先に「授業

に真剣に取り組むこと」です。これが教師の仕事のすべての基本です。

校務分掌にしても生徒指導にしても、若い教師がうまくできない、分からないというのは最初は許されます。

しかし、授業に関しては、新任もベテランも関係ありません。それは授業技術がうまいか下手かではなく、誠心誠意で生徒と向き合っているか、責任を果たしているかが重要です。

例えば、授業で生徒の質問に対して答えられない場面があっても構いません。きちんと次までに調べてくると約束して、しっかり次の機会に答えればよいのです。ごまかしたり、サボったりしないで、生徒と向き合い、責任を全うする授業が大切です。新任教師は、まず授業ができて一人前であると言えます。

中堅教師の責任

—では、中堅教師・ベテラン教師に求められている役割とはどのようなもののでしょうか。

服部 教師になって15年程度が中堅教師でしょうか。年齢でいえば30代後半くらいです。その頃は、ある程度は自分の授業の方法も確立して、余裕を持てるようになります。

中堅教師は校務分掌などにおいても、主任を務めたり、責任のある役割に就いたりするなど、中心的な役割を担当します。

このあたりから、チームワークが必要とされる校務分掌において、責任者として頑張ることができるタイプと、協調性や協力関係をうまく築くことができずに責任者になれないタイプに分かれることがあります。しかし中堅教師であれば、ここからさらに職能を伸ばしていかなくはいけません*1。

今までの学校は、自分の担当の授業さえやっていれば協調性がなくともやってこられたということがありましたが、これからの学校はそうはいかないのではないかと思います。

—「学校」という組織の特有な性質ですね。

服部 学校組織は、民間企業や役所などと違い、上下関係の非常にあいまいな組織で、校長や教頭といった管理職以外は、新任でもベテラ

ンでも同じ教師として処遇されます。一人ひとりが専門職ですから、個々に裁量と責任があるのだと前向きにとらえれば、若い者も遠慮なく意見が言えるという学校の在り方は、本来正しいものです。

学校は企業などとは異なり、若年でも前面に立って組織の活性化を図ることのできる可能性を十分に持っています。うまくいっている学校では、「若い者のいい意見も取り入れよう」という空気があり、意見の出やすい状態になっています。

しかし同時に難点として、言うことは言うが、その結果に対して誰も責任を取らない、好き勝手に意見を言い合うだけの集団にもなり得るということが挙げられます。

また、教員同士で結束して、管理職と対立するということも起こります。そこで一部の自治体が施策を進めているように、校長の権限を制度的に強くしていくということも起こっているわけです。

そこで、話をベテラン教師の方に戻しますと、ベテラン教師は教師集団を適切にサポートし、集団の方向性を決める重要な役割を担っています。とはいえ、そのような役割を立派に果たすベテラン教師はなかなか現れないのが現状ですが(笑)。

学校においては、学校を担うさまざまなリーダーを意図的に育てることは実際は困難です。健全なリーダーを育成する機能については、今後の課題であると言えるでしょう。

「熱血」できない教師たち

—学校を取り巻く環境の近年の変化についてはどう考えますか。

服部 昔は、「学校」は特別な世界であり、教師はその世界の中だけで生活することができました。そして、保護者からも地域からも「先生」は一定の敬意を得られていました。

しかし、今は、学校の中に閉ざされていたものが外部にさらされている時代です。教師は、学校の中だけでなく、保護者や地域に対しての適切な対応を求められるようになっていきます。学校

教育の成果や教育内容について説明をすることのできる能力が求められているのです*2。もはや教師は独善的な存在ではやっていけません。

教師の基本的な条件として、私は「熱血」であることを最初に挙げましたが、今では、熱血だけでは済まなくて、もし教育活動中に事故などがあれば、賠償問題などが生じてくることもありますので、どうしても慎重にならざるを得ないところもあるでしょう。

こうした時代では、熱血教師でいることは難しいかもしれません。最近の教師は、生徒と人間関係を築くというよりも、契約関係を結んでいるようにも見受けられます。そこでは、生徒への対応も形式的にならざるを得ないですし、その意味では、困難な時代といえます。

今の学校に求められる役割

—今の学校に求められているものとは。

服部 学力を伸ばすのは塾、と保護者が判断し、学力は学校ではつかないと言われがちです。本当はそんなことはないと思いますが。保護者からは、社会性を育てる場としての学校が期待されています。

生徒にとっての学校は、友達に会う場所としての意義が今は大きいようです。学校を好きな理由は「友達に会えて話せるから」「いろんな

行事が友達と一緒にできるから」という意見が多いようです。

そこでは、教師とは何かということが改めて問われます。やはりここは教師の仕事について、きちんと教師自身が意識することが大切だと思います。

これからの教師へ

—これから教師を目指している読者の方へ一言お願いします。

服部 今の学校を取り巻く現実には厳しいものがありますが、自分なりの教育の理想を持って教職にチャレンジしてほしいと思います。理想は、その通りに実現することは少ないですが、理想を持っていない人は、すぐに現実に押し流されます。理想を持っている人は、現実につまづいても、立ち直って再挑戦していきます。自分なりの教育の理想を実現するという熱い心を持って、教職を目指してほしいと思います。

(インタビュー／編集部・横山晶子)

[プロフィール] **服部 次郎** (はっとり じろう)

1943年生まれ。筑波大学教授(附属学校教育局)、筑波大学附属坂戸高等学校長。現在、全国総合学科高等学校長協会副理事長、関東地区総合学科高等学校長協会会長、全国高等学校長協会理事等の要職も務める。

[関連用語解説] ●● 気になることば

*1 教員研修

教師の職能を伸ばすため、さまざまな教員研修が実施されている。その中で初任者研修・10年経験者研修について紹介しよう。

(1) 初任者研修制度

教育公務員特例法第23条の規定に基づき、公立の小学校等の教諭等の任命権者は、当該教諭に対して、その採用日から1年間、教諭の職務の遂行に必要な事項に関する実践的な研修を実施。

実践的指導力と使命感を養わせるとともに幅広い知見を得させることを目的とする。校内研修、校外研修、宿泊研修などがある。

(2) 10年経験者研修

教育公務員特例法第24条の規定に基づき、公立の小学校等の教諭等のうち、在職期間が10年に達した者に対し、都道府県・指定都市・中核市教育委員会が研修

を実施。平成15年度から行われている。「個々の能力、適性等に応じて、教諭等としての資質の向上を図る」ことを目的とする。

任命権者により、当該者ごとに10年経験者研修に関する計画書が作成され、長期休業期間中の研修や課業期間中の研修等が実施される。

*2 学校の説明責任 (アカウントビリティ)

学校の説明責任とは、学校の権限の行使に伴う責任を果たしたかどうかを説明する責任のこと。1998年9月の中教審答申「今後の地方教育行政の在り方について」の中で教育委員会や学校の説明責任の明確化が提言されて以来、学校で重要視されている。

その後、学校教育法施行規則の改正により、2000年度から学校運営の状況等を周知するなど学校としての説明責任を果たしていくことを目的の一つとして、学校評議員制度が導入されている。

深澤孝之先生の教師生活

埼玉県 筑波大学附属坂戸高等学校

平成9年度赴任 3年担任 教科=工業・情報 35歳

■土曜はほぼ仕事、長期休暇で旅行も

Q 高校教師ならではと思われることは何ですか？
 「自分の教科の内容について指導することはもちろんですが、担任を持っていると、朝のショートホームルーム（SHR）で遅刻してきた生徒を指導したり、生徒の健康などに気を配ったりすることも大切な仕事だと感じています。特に今は3年生の担任ということもあり、進路相談や三者面談をしたりと、進路に関する指導も教師ならではの仕事です」

Q 授業以外にどんなことを担当していますか？
 「部活動のバスケットボール部の指導を担当しています。また、本校は大学の附属学校で、年に2回、30人程度の教育実習生がやってきます。その教育実習の大学との連絡調整などに関する仕事をする教職課程委員を務めています。昨年と今年は関東地区総合学科校長協会の事務局担当という仕事もあり、研究大会などの企画や校長会総会の準備などもやっています」

Q 毎日の授業の準備はいつしますか？
 「授業の空き時間や放課後の時間にしています。ただ、授業の空き時間では落ち着いてできませんので、主に放課後を利用しています。また、実習を担当することも多いので、休日に実習の材料を東京・秋葉原に探しに行ったりすることもあります」

Q 休日は何をして過ごしますか？
 「本校は土曜日でも検定試験や特別授業、PTAの行事などを行っているので、土曜は学校に出ていることが多いです。日曜は部屋の掃除や都内へ買い物、余

裕のあるときは車を走らせて近場の温泉などに行くこともあります。土曜出勤した分は、長期休業中にまとめて休めるので、その時に国内・海外旅行に行ったりしています。旅行は新しい発見があるので好きです」
 Q 教師生活でここが楽しい、うれしいということをお教えてください。

「授業の準備をしながら『生徒がこういう反応をしてくれればいいな』と考えていたように授業がうまく進み、生徒の表情がよくなったときは、苦勞して準備したかいがあったと、うれしくなります（実際は逆の方が多いかもしれません）。また、3年生の担任として卒業式を迎え、生徒と一緒に喜ぶことができるのは、他の職業では味わえないこれこそ教師の醍醐味だと思えます。本校は3年間持ち上がりが原則ですので、その思いもより強くなります」

Q 大変だ、つらいと思うことは何ですか？
 「大学に進学できる力はあるのに経済的な理由で進学をあきらめなければならないという場面に遭遇すると、大変やりきれないです。お金に関することはいかんともし難い問題です。また、卒業時には喜んで進学、就職した生徒が、大学や仕事を辞めたという話を聞いたときも、もう少し本人に合う進路を一緒に探すことはできなかったのかと考えてしまいます。『教師の仕事は終わりが無い』というのも事実で、「やらなくてもいいものだけど、やった方がいい」ということが多いので、それは大変だと思います」

高校教諭・深澤先生の一日

